

# HOKKAIDO

PROFILES

# ARCHITECTSの横顔

## vol.02

今号の建築家

近況ニュース 12



上原秀晃

HIDEAKI UEHARA

02



石田純枝

SUMIE ISHIDA

06



菅原秀見

HIDEMI SUGAWARA

08



五十嵐雄祐

YUSUKE IGARASHI

10

## 独自の発想で素材や集合住宅のプロトタイプを開発



出会った人との縁を大事につなぎながら、他人にない視点で建築に向き合ってきた上原秀晃さん。特に集合住宅のフィールドに挑んだパイオニアだ。

### 上原秀晃

Hideaki Uehara

JIA 登録建築家 / 1989 年入会  
シニア会員 (2022-)

#### 略歴

1940年 東京都生まれ。1964年 株式会社観光企画設計社入社。1965年 早稲田大学工学部建築学科卒業。1984年 株式会社建築企画設計社取締役札幌支社長。1986年 株式会社ディーシービー設立。受賞等：1985年 BCS 賞受賞『ビレッジ・アルファ』、1990年 北海道建築賞知事賞『アルファ・コート』の全体プラン設計、2005年 日本建築家協会北海道支部住宅部会アカシア賞『TWIN PATIO』

#### 建築家・吉阪隆正に心酔

数学や物理の方面に進もうとしていた上原さんは「東北大を受けたんですが残念ながら落ちまして、最終的には早稲田の二理(現・理工学部)に行ったんです」と言う。なぜ二理に決めたのか記憶にないそうだが、結果的にそこで建築家・吉阪隆正と出会うこととなった。

時は60年安保の闘争激化の頃。上原さんもそのうねりに呑み込まれ、学業よりもバイトとデモ活動に明け暮れる日々だったとか。その一方で、大学では「吉阪研に入っているわけじゃないけど、僕は吉阪さんにすごく心酔していたんです」と言う。外交官の家庭に育ち世界中を回っていたという吉阪さんの視野の広さを敬っていた。上原さんが一所懸命に取り組んだ卒論も「だけど君、視点がこう変わると、これすぐに変わっちゃうよ」と言われ、そんな見方があるのかととても勉強になった。また別の機会に、吉阪さんの事務所の光景に感心する。スタッフがアイデアを出し模型を作り、なんとそれを吉阪さんが一晩のうちに直し、さらに皆で喧々諤々を繰り返していたのだとか。

「本当はそういう仲間に入りたいと思っていたんだけど、もう僕は昼はバイトで夜はデモ(笑)」。機会が訪れなかったよう。

そんな上原さんに吉阪さんは観光企画設計社というホテルや観光施設を設計する会社を就職先として紹介した。今でこそ規模も大きいホテルの設計は魅力的だが、当時、設計者を目指す学生にとっては興味の対象ではなかった。でも「吉阪先生が言

うんだから」と思って勤めに乗った。「上原君、とにかく3年は黙っていれよ。何が良くて悪いか、自分に合うかどうかかわかるから」と言われ、最低3年の約束で入社したのだそう。

#### 他人のしないことをする姿勢に倣う

社長の柴田陽三さんは建築家・坂倉準三の事務所に勤めながら二理で建築を学んだという経歴の持ち主。他人のしないことを一所懸命にする人物で、当時、病院建築なんかは既に専門化されていたが、ホテル建築はまだの時で(東京オリンピックを機に日本中にホテルが増える状況ではあった)、「つてがないからこそ、専門家するんだ」と言って特化した。独自の着眼でコンピューター



『旧帝国ホテルの実証的研究』(著者の明石信道氏が帝国ホテルの解体に際して調査に入り実測した内容をまとめた本)を見ながら、「ライトの事務所に行ってきた日本人が結構いるんですね。いろいろ仕事をしているんだけど、ほとんどがライトの意匠の方に偏っている。僕にとっては構造が素晴らしい」と熱く語る上原さん



ホテルアルファ・サッポロ(1980年竣工)。アルファ=レンガというイメージはここから始まった。寒冷地で初めての建築で、断熱仕様については施工担当の大林組に学んだそう(残念ながら2022年解体)

に条件を入れると面積表が出るプログラムを生み出し、社内にインテリア部門を抱え、海外事業も始めた。

上原さんは柴田社長の姿勢に倣いながら、国内のホテル建築はもとより、シンガポールに常駐してマンダリンやシャングリラといったホテルも担当。いつしか、吉阪さんから言われていた3年は過ぎていた。

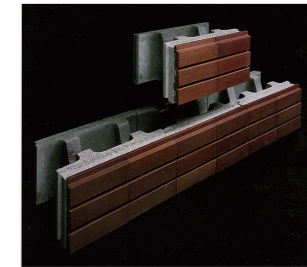
#### 北海道へ。素材開発にも取り組む

ホテル設計も10年以上のキャリアとなっていた頃、たまたまかかってきた電話の対応をしたことがきっかけで、上原さんは札幌のホテルアルファ・サッポロの担当になった。ここから建主である関兵精麦という仙台の会社の関光策さんとの仕事が始まった。

上原さんが好きな建築家はフランク・ロイド・ライトで、中でも『旧帝国ホテルの実証的研究』(明石信道 著/東光堂書店、1972年発行)を見て、注目されがちな意匠だけでなくライトの構造の考え方に着目していた。

「ライトのホテルは2階高の中に3層が入っているんです」。

実際の設計ではいろんなことが違いすぎて同じようにはできなかったそうだが、高さ制限のある中で設計したホテルアルファ・サッポロで応用。特に1階のロビー階は、約2階高の中に上階を支える大梁を意匠として見せつつ天井高を確保し、ロビーから床高を数段下げてラウンジ、さらに下げてコーヒョップ、その上部の空間にバー(ラウンジからの階段で上がる)という立体的な構成で伸びやかな空間とした。関さんは美意識が高く、上原さんのそのような提案を受け入れてくれた。また、外装には冬の凍害への心配から低層部は大型の打込タイルを、高層部分はタイルを貼り付けたプレキャストコンクリートのパ



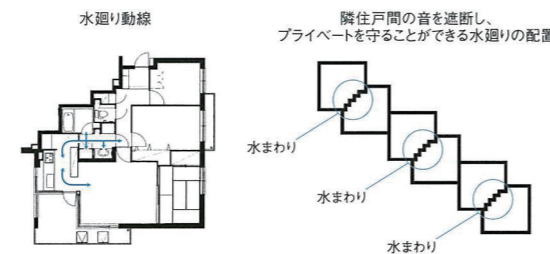
オリジナル開発のアルファ・ブリック(上/珪器質レンガタイル打込コンクリートブロック。構造と外装の同時施工)を用いる低層集合住宅のアルファ・コートシリーズ。アルファ・コート伏見I(右/1983年竣工)は建設省建築研究所のRM構造(レインフォースト・メーソロジー)のパンフレット表紙にも写真が使用された



ネルを積み上げていく方式を採用。タイルには珪器質のレンガを使用。それを全館に用いたことで「アルファ」のイメージとなり、後のプロジェクトに継承されていく。

もともと関さんは札幌の隣町の江別で集合住宅(ハウジング事業)を手がけるために北海道に進出しており、上原さんはその設計も担当した。数学や物理が好きなことから構造への興味があり、どうせなら躯体から新たに取り組もうと考えた。

ちょうどコンクリートブロックの生産性が高まり、特に北海道(と沖縄)はブロック造が盛んでもあったため、「アルファ」のイメージに合う珪器質のレンガタイルを打ち込んだコンクリートブロックの開発を進めた。ところが、一般的な補強コンクリートブロック造では施工手間に難点がある。そこで、まずは東京の小林ブロックという会社で開発したブロックの上下左右を雄雌に噛むよう成型したモルカットの特許技術を導入し、タイル一体成型のブロックを江別の工場で生産する目処をつけ(関さんが特許購入と工場を建設)、従来の施工性の低さの原因であるモルタル接着に代わる方法を模索。札幌の寒地建築研究所に相談したところ、当時の部長さんに「こっちに住んで北海道のためになることを考えるんだったら全面的に協力するよ」と言われ、その一ヶ月後には札幌に移住したのだそう。そしてセメントペーストによる接着工法を見出し、施工性を改良した。そこで生み出されたのが独自の素材「アルファ・ブリック」とその工法だ。さらにブロック(の空洞部分・縦横)にモルタルを全充填することでライトのテキスタイル・ブロックにも通じるものになると考えたのだとか。これにSECコンクリートを組み合わせると、札幌圏で低層集合住宅(組積造のため3階建てまで)のアルファ・コートシリーズが多く展開された。



T2システムのプロトタイプによるパースシティ 柿生(左/1997年竣工)。雁行型(上)とすることで端の住戸だけでなく中間に位置する住戸も全て3面開口を可能にした。バルコニーを室内側に引き込んだ半屋外空間的なインナーバルコニーとL型コーナーウィンドウによって従来の分譲マンションにはない大きな開口を実現。また、表面積が大きいことでコストアップになりそうな点については、予算配分がシビアなホテル設計の経験を生かしてクリア。主に札幌と川崎で展開した



H2システムのプロトタイプによるユニテ宮崎(左/2000年竣工)。斜面地住宅は立体的な雁行ととらえ、斜行を生かし基礎を斜めにし、地耐力ではなく地盤との摩擦によって持たせるという考え方で、従来の階段状の基礎よりも土木工事の低減・コストダウンを実現した環境を壊さない独特の工法。広いルーフトラスが魅力で、戸建感覚で各戸に優れた採光性と眺望をもたらすプランとなっている

### 独立後バブル崩壊、分譲 MS プロトタイプ作成へ

集合住宅事業と並行して、関さんはアルファリゾートトマムの開発にも着手。もれなく上原さんも一緒に、その頃には設計以外のさまざまな相談にも乗っていた。ザ・タワーに取り組んでいる頃、柴田社長から「少しやり過ぎだぞ」と苦言がきてしまったのだそう。あくまで全ては設計のための行いだったが、本来の業務を超えていたことは確か。しかし、それで設計を止めることにはならない。それで「ディーシービー (dcb) という会社を作ったんですよ」と、独立したのだと言う。

時はバブル景気の真っ只中だった。ところが、間も無くしてバブル崩壊を迎えてしまう。それまで進んでいたホテルやゴルフ場のクラブハウスなどの計画が止まり、仕事がなくなってしまったのだとか(関さんとの関係も薄らぐ)。そんな厳しい状況の中、唯一、光明が見えたのは分譲マンションの仕事。しかし、そも

そも興味がない上に既存のデベロッパーには出入りの設計事務所がいて、上原さんに刺さり込む余地はない。どうすればいいのか、かつての柴田社長のように他の人にもない視点で考え、一つのアイデアが思い浮かんだ。

「プロトタイプを作ればいいんじゃないかな」。

あるデベロッパーのためではなく、集合住宅としてのプロトタイプだ。そして、ゲームのテトリスから着想を得て、2住戸を1ユニット(接する部分を水まわり)として雁行させて連続していく「T2システム」(以下、T2)を考案。ユニット間の凹んだ部分を階段などの共用スペースにあて、全戸角部屋で3方位採光が可能以上に、L型コーナー窓、インナーバルコニーといった当時の分譲マンションとしては画期的な要素を導入。そのオリジナリティのあるプランは、新規参入する札幌のデベロッパーに採用された。モデルルームを見た女性から「きゃー、これが欲し

かったの!」との声が上がリ、手応えを感じたそう。T2は人気を得て、1994～2000年までに道内外で26棟が建った。

次に取り組んだのは、斜面地でのプロトタイプだ。T2を見た川崎のゼネコン・デベロッパーである末長組の根本社長が「上原くん、これ、東京でやるから」と素早く反応。ここから同社との仕事が始まり、まずは川崎で試みられることに。ところが、川崎は斜面地が多く、従来の手法では基礎が階段状になるゆえにお金がかかり長い工期も要する。そこで斜面地なりの作り方を模索し、構造家に相談することに。京都駅を手がけて多忙な木村俊彦氏を訪ね、斜行を生かした構法(地盤との摩擦力を生かす)にたどり着いた。T2の発展型として「H2システム」と名付け、斜面地での建設コストを大幅ダウンし、各住戸に眺望と採光をもたらすテラス住宅が多数実現した(1996～2002年まで9棟)。

分譲マンションのプロトタイプは他に、限りなく戸建てに近いワンフロアに1戸タイプの「RJ」、T2を発展させて雁行十字の連層耐震壁とP.P分離の回遊型平面を持つ「P2Cシステム」、アルファ・コートシリーズ以来となる低層で中庭囲み型の「C2システム」、各住戸の居間にプライバシー性の高いパティオが接続する「パティオシステム」と、広がりを見せていった。中でも成城の高級住宅地で建設されたパティオシステムは、モデルルーム公開前に、タイミングよく雑誌の分譲マンション特集で末長組がランク1位となったことも手伝ってか、問い合わせが殺到し、あっという間に完売したのだそう。

### 新たなチャレンジ

分譲マンション事業は、とにかく販売会社が力を持つ。事業には大きな金額が動くが、そこにおける設計料の割合は僅かなもの(工事費の3%程度)。上原さんは既存の仕組みに問題を感じ、新たなチャレンジを始めた。

札幌の円山西町を建設地にしたコーポラティブ形式の集合住宅のプロジェクトで、円山スタイルとして、事業利益ゼロ(デベロッパーがない)、工事利益ゼロ(ゼネコンがない)、販売経費ゼロ(販売会社がない)、広告経費ゼロ(広告代理店がない)、必要資金ゼロ

パティオシステムのプロトタイプによるロイヤルシーズン成城(右2点/2006年竣工)。住人が裸でいられる程プライベートなテラスのあるコートハウス型のプロトタイプを作ろうと半年考え抜いたプラン。共用の中庭を持ちつつ、全戸の居間から外部へと連続する生活空間としてのパティオを備え、多面開口も可能にした解放性と独立性が両立する豊かな低層集合住宅



口(世間に知られていない・ブランド力がない)、事業の秘密はゼロ(これが一番大事)の7項目で「セブンゼロ」を掲げ、計画を進めた。設計はもちろん上原さんだ。それまでの実績や人脈、知見などを駆使して事業資金(融資)の調達や敷地の入手、建設会社や購入者の確保に尽力し、計画の実現まであと少しというところまで進んだ。ここまで果敢に挑んだのは、設計事務所にできる集合住宅のビジネスモデルを作りたいとの思いからだっただけだ。ところが、2020年からの新型コロナウイルス感染症による影響から、世界的な建築用木材の需要増および価格高騰、つまり「ウッドショック」が引き起こされた。その煽りを上原さんも受けてしまう。

「本当に最後の仕事と思って頑張ってたから、誠に残念だったんだけど、まあ、止むを得ないですね」と、プロジェクトを断念せざるを得なかったのだそう。

### 仕事は自分で見つけ、作ることができるもの

「僕はほとんど営業力がないんです。たまたま縁があってお会いした人を大事にしながら、それが切れないうちに次から次へとつなげていくようなやり方をしてきました」と、振り返る。吉阪隆正さんとの出会いが柴田社長へとつながり、人のしないことをするという姿勢を継ぎながら、関さんと末長組との仕事を一所懸命につないで、独自に建築素材やプロトタイプの開発、新たなビジネスモデルにチャレンジしてきた。

2021年12月、上原さんは事務所を閉めた。JIAではシニア会員となった。現在は、鹿児島県の霧島と札幌を歩き来ている。霧島では温泉付きの中古住宅を購入してリノベーションを行ったのだそう。基礎だけを生かして平家にし、木製トリプルサッシを使用するなど断熱性能を高めた新たな住まいに生まれ変わらせ、快適な暮らしを楽しんでいる様子。

そんな上原さんが若い建築家に伝えたいことの一つは、仕事の見出し方。「設計の本来のやり方で見出ししていく。いろいろな方法があると思うけれど、自分で見つけていく。そうすれば仕事って作れるものだと思います」と、凜とした表情で語った。

# まちづくりにリアリティを持てるのは、建築が軸足だから



旭川を出て生活をしたことがないという石田純枝さん。建築はもとより、近年は地域のまちづくりに力も注ぐ。その活動を繰り広げるのは、もちろん旭川とその周辺。まさに地域に根ざす建築家である。

## 石田純枝

Sumie Ishida

JIA 登録建築家 / 1998 年入会  
北海道支部旭川地区会グループリーダー (2020)

### 略歴

1962年 旭川市生まれ。1984年 北海道東海大学芸術工学部建築学科卒業。あとリエコア入所。1995年 有限会社 建築計画工房あとリエコアに改組、代表取締役。2020年 有限会社 建築計画工房あとリエコア解散。受賞等：1998年 北の住まい設計コンペ入選、1994年 農村景観にふさわしい農家の住まいづくりコンペ最優秀賞（共同参加）

### 建築やデザインが身近な環境で育つ

「絵を描いていれば幸せっていう子供だった」と言う石田さんは、叔父さんが建築会社を営み、お父さんもそこで働いて、いとこが設計の方面に進むという環境で育った。だからと言って同じ方面を強く希望していたわけではなかったが、高校生の時に旭川に建築とデザインを学べる北海道東海大学芸術工学部ができた。進学に際しては地元を出たい気持ちがあったそうだが、諸事情から現実的ではなく、進路を迷っていたのだとか。そんな時に高校の先生から「北海道東海大学は面白い大学だよ」と聞いたことと、やはり幼い頃から建築やデザインが身近だったことが背中を押し、同大学へ進むことに。決め手は「建築かデザインかの二択じゃなく、その合間の重ね合わせたものに惹かれたんじゃないかな」と言う。

専攻は建築。芸術と工学を結びつけた教育環境で、「片方でスケッチをガンガン描き、もう片方では構造計算など（建築の）リアルなことをする、その両方の学校だったので面白かったですね」と話す。中でもデザインの授業は楽しく、途中で学科交換も可能だったそうだが、結局建築のまま進み、4年時は設計を目指す学生が多い大野仰一先生の研究室で学んだ。

### 電話番号と読書だけの日々から設計の仕事へ

就職活動の時は氷河期で、特に設計事務所希望の場合は困難を極めたのだそう。結局、行き先を見つけれなく、就職浪人

状態に。そんな石田さんが向かったのは、大野先生が同大学の橋場光先生と学外のアトリエとしていた「あとリエコア」。当時、事業所ではなかったが、建築関連の本がたくさんある魅力的な場所だったようで、「電話番しますから、本を読ませてください」と、半ば転がり込んだのだそう。

ひたすら本を読むばかりで何も見出せない日々が続いたが、ある時、図面を描くアルバイトの話があり、実務に触れる機会を得た。図面の描き方や木造の構造とその納まりを覚え、自分でも考えるようになっていった。次第にあとリエコアで相談を受けた仕事を手伝うようになり、本を読む時間が減っていったそう。設計が楽しくなり、スタッフとして実務を引き受けるようになっていった。仕事が増え、事務所は法人化し、石田さんが代表になった。実績の中心は住宅で、実作を見た人から依頼が来るなど、忙しくなっていた。

あとリエコアで手がけた住宅の模型。設計を通して多くの人の人生に関わってきたが、「今、設計はちょっとお休みして、まちづくりにシフトしている感じ。だって、設計する人はいっぱいいるもの」と話す



### 人は住宅に住み、地域に暮らすもの

一方、大学の先生達の近くで仕事をしていたことが、まちづくりに関わる機会をもたらした。市や道による委員会の委員になる割合が少しずつ増え、「人は住宅に住むけれど、地域に暮らすものだな」と思い、まちづくりに興味を持つようになったと言う。そして「建築に軸足があるから、リアリティを持てるんですよ」とも。

まちづくり系の仕事では、構想作りだけでなく関連資料や報告書の作成業務も多い。石田さんが統括の立場となって作成チームを組み、仕上げていくというスタイルで進めているそう。

その実績の一つは「石狩川上流サイン設置指針」の作成。国土交通省の事業で、石田さんは最初、石狩川上流域の川づくり懇談会に呼ばれて行った（景観に関するポジションとして）。回を重ねる中で河川周辺に位置情報などを掲示するサインのデザインにルールがないという問題を知る。そこで整備の仕方について発言をするうちに、河川管理の担当が数年で変わっても対応（更新）できる指針の作成が決まった。そして石田さんの働きかけでコンサルタント事務所やグラフィックデザイナーなどと協働して、デザインコンセプトからサインの構成、ピクトグラム、掲示する看板類の素材や塗装までを考案。現地調査やワークショップ、社会実験を経て設置指針が完成した。現在、これに則って河川空間が整えられている。

また別の実績に、農家集落の再編成を目的とした「にしかぐらアグリコレクティブハウスの提案」がある。限界集落化しつつある西神楽地区（旭川市郊外）の農家集落において、健全な暮らしをしながら長く住み続けるための構想をまとめたものだ。そもそも農林水産省の事業で、当時、国は産業はもとより住むことへの支援が重要と考えていた。地元NPOが事務局となって協議会が結成され、石田さんは道の北方建築総合研究所と共にワーキングメンバーとなり、基本構想を作成した。地域住民とのワークショップにはJIA旭川地区会メンバーも参加した。構想をいかに地域住民に伝えるかが次の課題であった。そこで、リーフレットの作成と配布を提案。地元デザイナーの皆さんの協力で、構想をビジュアルに表現したリーフレット『まちが、ひとつの家族になる。』を完成させた。

「にしかぐらアグリコレクティブハウスの提案」をまとめたリーフレット『まちが、ひとつの家族になる。』（右2点 / 西神楽農家住宅推進協議会2019年3月発行）より。西神楽の地域へは10年程関わり続けているとのこと

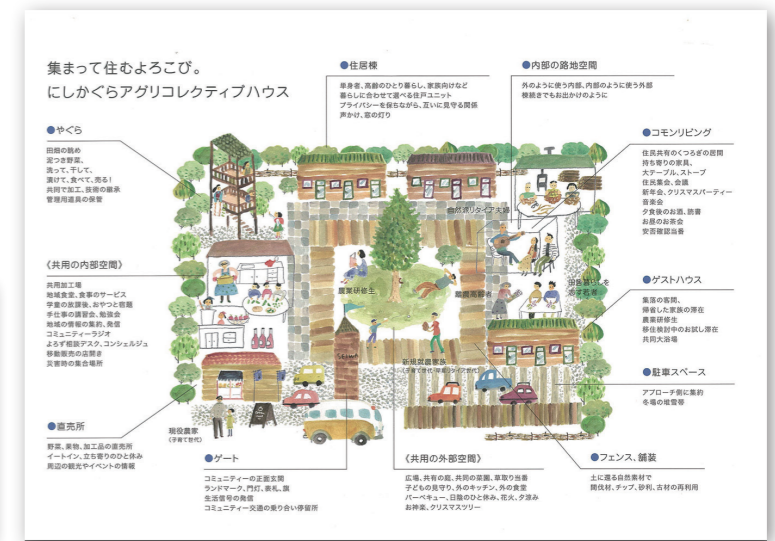


「石狩川上流サイン設置指針」（2021年改訂版 / 国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部 旭川河川事務所発行）より。指針作成には7～8年を要したそう

### まちづくりへの参加を若い建築家にも呼びかけ

「建築家の仕事なのかって言われたら、そうじゃないかもしれない。でも、こういうこともするのが建築家なんじゃないかな」と言い、さらに同地域で所有者不明の空き地の円滑利用や他の近隣町村の中心市街地活性化の事業にも取り組む。農村集落も中心市街地もテーマは同じで、「永く地域に暮らすためにはどうしたらいいか」。中心市街地では下階に商店、上階に高齢者住居（施設）という一般的な構成ではない建物の分棟配置やメンテナンス、住み方などの基本構想を提案。そして、JIA旭川地区会の若手にもこういった事業への参加と経験の機会を共有しているのだそう。できればJIAが地元の専門的アドバイザーとして位置付けられて、信頼を得るようになるといいとも考えているそう。

石田さんは2020年に事務所を解散して（後年は一人の運営のため自分に何かあった時のことを考えて決断）活動をしている。今後の展望として、「構想が実行されて地域で育まれていくところを見たい。それと、そのことを考え続ける人が後に続いて欲しいから、そこをつなぐのは自分の仕事かな」と、話す。



## 何かがちょっと生まれるような場所をつくりたい



積雪寒冷地の設計技術を培ってきた北海道日建設計を経て、手がけたプロジェクトは50程になるという菅原秀見さん。使う人に作用し気づきをもたらす空間を思考する。

### 菅原秀見

Hidemi Sugawara

(株)日建設計 設計グループ  
JIA 登録建築家 / 2005年入会  
北海道支部職能業務グループリーダー  
(2020-)

#### 略歴

1965年 アメリカ生まれ。1990年 北海道大学大学院工学研究科建築工学科修了。1990年 (株)北海道日建設計入社。2022年 (株)日建設計設計グループ。受賞等：2016年 公共建築賞「小樽高等支援学校」、JIA環境建築賞 一般部門優秀賞「北見信用金庫紋別支店」、2018年 第4回北海鋼構デザインアワード 最優秀賞「大通交流拠点地下広場」、2019年 JIA北海道支部建築大賞2019 大賞「北見市立留辺薬小学校」、など

#### 体験に導かれて

「何となく建築って思って」進路を決めたと言う菅原さんは、北海道大学で建築を専攻し、計画系の研究室に入った。まちづくりに関心を持ち、大学院に進んで修士論文までまとめたが、気持ちは設計に傾いていたとか。実は小学生の時に自宅の建て替えがあり、図面を描いてみたり建築現場が楽しかったという体験をしていた。就職後に「あの時、建築っていいなと思っていたんじゃないかな」と、ふと納得したのだそう。

就職では北海道日建設計の斡旋があり、学生アルバイトを経て入社。同社は、1956年から北海道における文化や気候風土にふさわしい建築や都市デザインに取り組み、積雪寒冷地での設計技術と実績を培ってきた。

菅原さんは、最初の数年間は「過酷でしたな」と、ハードワークの中で鍛え上げられていったよう。8年目の頃、設計チーフ

として『札幌コンベンションセンター』を担当。コンセプトから手がけ、JVもまとめた(年上の人ばかりの現場)。「放置されたというか(笑) すごく大変でした」と言うが、その経験は設計の達成感と転機をもたらした。その後も教育、劇場、金融、宿泊施設など多くの案件に携わる。入社以来、主体的に関わったプロジェクトは完成したもので50程になるのだとか。

#### 使う人目線、公共性、そして空間の力

菅原さんが惹かれるのは、ルネッサンスや近代建築の初期など時代が大きく変わる時の動きだそうで、「そこに人間性が介在しているのがわかると面白い」と言う。そして、いわゆる組織事務所の体制下で、自分らしさにこだわったことはないそ

①②小樽高等支援学校(2011年竣工/撮影：①菅原秀見 ②酒井広司/意匠設計責任者として担当)。公共建築賞を受賞し、「あれは嬉しかった」と言う。③④北見市立留辺薬小学校(2019年竣工/撮影：③佐々木郁弥 ④菅原秀見/プロジェクト責任者として担当)。木梁のひとつ屋根の下、「中央ひろば」を中心に特別教室・普通教室・体育館を配置。中断面集成材と(見えない部分に)コンクリートの耐震壁・鉄骨梁を併用したハイブリッド構造



大通交流拠点地下広場の「つながりの広場」(2016年竣工/撮影:中村友紀/プロジェクト責任者として担当)。そこに来る人が何をするか「想像するのが大事」と、検証を重ねた。高さや大きさの異なるテーブルやベンチは程よい距離感

うだが、設計において特に意識するのは、クライアントのためだけでなく、その建築を使う人の目線や公共性とのこと。最初の数年間は迷って形ばかりを考えた時期もあったそうだが、次第にそういった思考になっていったよう。「住宅でも大きな建物でも、できると公共性を持ってしまふから、それに向き合わなければいけない。使う人がどんなことをするのか、そのアクティビティが地域にどう影響を与えるのか、単に機能すればいいということじゃなくて、その建築を使うことで人に何かをちょっと作用させたいというか、気づかせたいとすごく思うかな。空間ってそういう力があると思っているので」と語る。

その代表的なプロジェクトの一つが『小樽高等支援学校』だ。利用する子ども達の学習や生活の場を海と山を望む緑豊かな環境を生かした空間構成とするだけでなく、社会参加の訓練の場となるギャラリー棟を設け、カフェの営業も通して地域住民との交流のきっかけとなる空間を作ることができた。

札幌市民に馴染みの『大通交流拠点地下広場』も特徴的。地下鉄大通駅南北線コンコースの改修で、インテリアの刷新と利用者の通過動線の整理、滞留空間としての広場などを整備。特に広場は、不特定多数の人が利用可能な空間を検証し、多様な活動に対応する設えとなった。柱に付属する「止まり木」のようなテーブルやベンチは、休憩や会話を楽しむ人、仕事をする

人、待ち合わせの人などで常にいっぱいだ。公共性が高いながらも空間自体が留まっていいい所、有効利用できる居場所と思わせるようで、各々が節度を保って自由に活用している。

『北見市立留辺薬小学校』は、子ども達の主体性と感性に働きかけるような空間が考えられている。地場産木材を多用した開放的な木架構空間が展開する平家の校舎の中で、特に「中央ひろば」がポイント。周囲に各教室を分散配置し、図書コーナーや余白的な空間も含めたこの広場では、休み時間や放課後に子ども達による思い思いの光景が広がる。そして、この小学校は地域の教育拠点としてシンボリックな存在にもなっている。

また、冬の寒さが厳しい中、内部に外部的な空間をどう作るかということもテーマの一つ。共用され、いろいろな人の動きができることを大事に考え、「何かがちょっと生まれるような場所をつくりたいというのはあるかな」とも言う。

#### 音楽にも空間がある

一方、菅原さんは中学2年でエレキギターを手にしてから音楽も欠かせない。現在は2つのアマチュアロックバンドを掛け持ち、時折ライブも開催。カバーする楽曲はDEEP PURPLEからONE OK ROCKと幅広く、「すごく楽しい」と言う。また、「建築って柱や梁とかを作るのが目的じゃなくて、それによって空間ができるわけじゃないですか。音楽もリズムがあり、そのリズムとリズムの間の空間っていうのがある。それが何か似てるかな」と、建築と音楽の相似性を見出している。

#### 今の延長で

2022年4月、北海道日建設計は日建設計と合併。菅原さんは日建設計北海道オフィスの勤務となった。以前から人事交流はあったが、今回の変化で情報共有もしやすくなったと感じているそう。そんな中、展望をうかがってみると、「今の延長かな。やり切ったことはないと思っていて、同じようなテーマでも施主も場所も違うから、また一からやりたいことができるように頑張るといふか、その繰り返しかな」と、謙虚に答えた。

## 建築を入口に、オールインのデザインへ



「何にでも興味があるんです」と言って、  
建築からアートへの企画事業まで幅広く手がける五十嵐雄祐さん。  
オールジャンルの窓口で、求められることに全力で応えている。

### 五十嵐雄祐

Yusuke Igarashi

(株) グリーンライトアソシエイツ  
代表取締役  
2011年入会  
北海道支部住宅グループ(2020-)、他

#### 略歴

1978年 札幌市生まれ。2001年 北海道東海大学  
芸術工学部建築学科卒業。建築設計事務所所属(東京)。  
2005年 株式会社エー・ジー総合設計所属。  
2011年 五十嵐ユースケ設計室設立。2016年  
(株)グリーンライトアソシエイツに改称。受賞等:  
2014年 第1回JCD北海道デザインアワード 優秀賞  
[TSURU CAFÉ] [TRATTORIA CUGIRA]、  
2015年 第2回JCD北海道デザインアワード 審査員特別賞  
[洋菓子ルモンド]

### スーパーマン的にデザインできる方が面白い

幼い頃から工作が得意で、物を作るか考える仕事がしたいと思っていた五十嵐さんは、大学進学前は「家具をやりたいかった。建築が一番ではなかった」と言う。ところが、高校での進学ガイダンスで、建築家は椅子を作るが、椅子の作家が建築を作るのは稀であることと、建築家になればいろいろなことができるという考え方に触れ、「スーパーマン的なデザインができる人の方が面白いかなと思って」と、建築を専攻することに。

入学したのは旭川の北海道東海大学芸術工学部。五十嵐さん曰く「なかなか珍しい環境だった」とのこと。極寒地の特性を生かしてログハウスやアイスドームを作る実習があった。また、土曜日に行われる「建築特講」(札幌からも聴きに人がいるほど)という国内の第一線で活躍する建築家が招かれる授業で、当時出始めの妹島和世さんや小嶋一浩さんの話と建築に刺激を受けた。特に小嶋さんの『スペースブロック 上新庄』に興味を持ち、「モジュールを(用いて)作っていくのがすごく楽しくて。気になっていたのかなあ」と、心に残っていたよう。

一方、アメリカンフットボール部に所属し副キャプテンも務めた。アメフトと設計演習に熱心な学生で、4年時は大矢二郎先生の研究室で卒業設計に力を注いだ。部活の顧問でもあった大野仰一先生(意匠)やアイスドーム研究の粉川牧先生(構造)などにも教示を仰いだ。そして、部活の後輩達に食事を奢る代わりに五十嵐さんのスケッチからボリューム模型を作るなど手伝

わせ、その光景は組織化した設計事務所さながらだったとか。懸命な取り組みの結果、卒業設計コンクール(道内)の同大学代表に選ばれた。しかし、就職活動には熱心ではなかったそう。

### 建築探訪、資格取得、独立へのステップ

そもそも独立願望があったが、粉川先生の紹介で東京の設計事務所に就職。意匠系ではないものの規模の大きな建物に携わることができ、いい経験になったとか。とりあえず1級建築士の資格を取って次の進路を考えるつもりでいたそう。休日は『建築MAP』シリーズ(ギャラリー・間 企画・編集)片手に、「47都道府県のうち、あと6つくらい行ったら全国制覇じゃなかったかな」と、東京をハブに日本中の建築探訪に勤しんだ。そして1級の試験には2年で合格。資格取得に必要な実務経験年数と合わせて4年半を勤めて退社した。「最初から忙しい(アトリエ)事務所に行っていたら資格も取れなかっただろうし、いろんなものを見る時間もなかったから、結果的に良かったかな」と言う。

次のステップは、独立も視野に入れつつ、大野先生から札幌でスタッフを探しているという建築家の情報を得て、早速、履歴書を持って向かった。ところが、他の人に決まった直後だったとか。そこで、別の建築家の紹介を受けた。それが宮崎正之さん(株式会社エー・ジー総合設計)だった。初めて知ったそうだが、会って話してみると、抱えていたモヤモヤが明快に解けたのだとか。最初に将来について聞かれ、「5年で独立します」と言っ

て入所することに。すぐに自社ビルの新築プロジェクトの担当となり、意匠設計の一通りを経験できた。「独立すると言っていたから、その準備をさせてもらった感じですね」と、宮崎さんの下で商業施設、斎場、住宅などさまざまな物件を担当し、設計だけでなくビジネス感も得た。その傍で事務所建物1階の「ギャラリー創」にも関わり(展示設営の手伝いなど)、出展する作家達との接点ができいったと言う。そして、担当業務の関係から5年ではなく6年後の2011年に独立した。

### 多様なジャンルに向き合う

住宅の設計を皮切りに、店舗や医療施設などのインテリアデザイン、スポーツ施設などの改修設計、宿泊施設の設計やデザイン監修、さらにはブランディングの相談や家具のカタログ監修、アートの企画事業などさまざまに携わっている。どんなことにも興味を持ち、来た仕事には全力で応えている。法人化する際に名称を「株式会社グリーンライトアソシエイツ」として個人事務所からチームとしての組織に転換。グリーンライトとは野球において塁に出たランナーが自分の判断で積極的に盗塁できる権利のこと。スタッフにも、いちいち五十嵐さんの顔をうかがわずに「行けると思ったら、どんどんチャレンジして行こう。そんな集団でありたい」との思想を共有している。

進行中という札幌アートヴィレッジ(札幌市南区芸術の森)でのプロジェクトでは、ホテル棟とセンター棟を担当。オーナーの要望にコンテナの使用があったため、既にある手法にも学びながら、基準(モジュール)となる鉄骨のコンテナを寒冷地の環境を考慮してコストを抑えながらJIS企画に合うよう構造家と組んで設計するところから手がけた。単体だけでなく、複合による空間作りもスタディした。さらに、「プレファブリックにどこまで行けるかに集中しよう」と、工期短縮も可能な限り検討を進めたそう。

業務の中で外せない分野となっているアート事業では、物作りが好きなおことから自ら作家となる機会もあるが、(宮崎さんでいうところの)ギャラリー創のようなものを場所を持たずにしたいと考え、創作活動を他の仕事をしながら続ける作家達の収入の手助けになるよう、五十嵐さんが手がけた空間に作品を置く場や仕組みを作ることに取り組む。

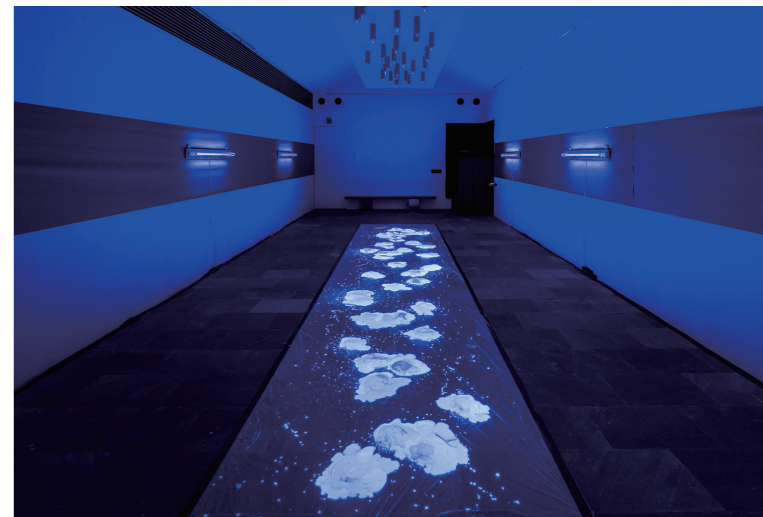
最近はディレクター的な立ち位置も多いようで、「オールジャンルの窓口でいいのかな。(依頼主が)空間的に困っている時に僕から誰かに頼んでもいいですし、うちでやれることをやってみよう」と言い、建築は一つの表現方法ともとらえ、多様なジャンルに向き合っている。そして、「理想は、建築から入って、アートのコーディネートとかまで全部行けたらいいな」という展望も持ち、「家具とか(も含めて)オールインでデザインできるような土壌を作っている感じです」と、歩を進めている。



FOCUS CANVAS(2011年竣工/撮影:KEN五島)。コンセプトは「集う」「揃う」。家族が集う空間を大事に、大黒柱を中心に据え(梁が集約)、「絵を描くキャンバス」のように生活スタイルの変化に対応できる空間を目指した住宅



札幌アートヴィレッジのプロジェクト。左はホテル棟(2022年竣工)。右はコンテナのスタディ模型。センター棟(建設中)では複数のコンテナを配して大屋根の掛かる大空間の検討もした(昨今の資材高騰の影響から木造へ変更となった)



「建築と美術展『したたり』」(2017年、茶廊法邑/撮影:佐々木育弥)。木工家の岸本幸雄氏との2人展で、建築と木工の共通点のある材料に見出し、光る液体として上部から滴らせるインスタレーション

### 第3回 JIA 北海道建築大賞 2022 開催・結果

3年に一度のJIA北海道建築大賞。その第3回目となる今回は、審査委員長に前回に続き飯田善彦氏((株)飯田善彦建築工房)、審査委員は一新して、米田浩志氏(北海道大学工学部建築学科教授)、高木伸哉氏((株)フリックススタジオ)を迎えて開催されました。2022年5月より応募登録が始まり、22作品の提出がありました。10月8日に「北海道の建築展2022」(札幌芸術の森美術館)の会場で公開投票による1次審査が行われ、絞り込まれた作品は続く2次審査に進み、設計者がプレゼンテーションをする公開審査によって6作品が選出されました。そして11月4・5・6日に、全道各地を巡って6作品の現地審査が行われました。審議での審査員による白熱した議論を経て、大賞、住宅部門優秀賞、一般部門優秀賞が1作品ずつ、さらに審査委員賞が設けられて審査員1名につき1作品が選ばれました。結果の詳細は下記の通りです。



- 大賞(1作品) 各賞 作品名/設計者/勤務先  
O project/宮城島崇人/(株)宮城島崇人建築設計事務所 [写真①]
- 住宅部門優秀賞(1作品)  
富良野の異形屋根/高木貴間/高木貴間建築設計事務所 [写真②]
- 一般部門優秀賞(1作品)  
會澤高圧コンクリート株式会社深川工場/圓山彬雄/(株)アープ建築研究所 [写真③]
- 審査委員賞(飯田賞)(1作品)  
浦河フレンド森のようちえん/照井康穂/(株)照井康穂建築設計事務所 [写真④]
- 審査委員賞(高木賞)(1作品)  
レストラン フェネトレ/赤坂真一郎・佐野 光/(株)アカサカシンイチロウアトリエ [写真⑤]
- 審査委員賞(米田賞)(1作品)  
界川の家/堀部 太/堀部太建築設計事務所 [写真⑥]

\*賞評はJIA北海道支部のホームページをご覧ください



2023年新年交礼会にて授賞式が行われた

### 北海道の建築展2022終了および13年ぶりのキタコブシ賞授与

JIA北海道支部設立35周年を記念して「北海道の建築展2022」が2022年9月23日から10月10日まで、札幌芸術の森美術館で開催されました。また、本展に先立ち、チ・カ・ホ(札幌駅前通地下広場)では、9月16日から18日まで告知展も開催されました。さらに、13年ぶりのキタコブシ賞(JIA北海道建築文化貢献賞)が写真家の藤塚光政氏に贈られ、会期中に表彰式および記念講演も行われました。詳しくは、別冊の「北海道の建築展2022」後記をご覧ください。

### 2023年新年交礼会を開催

去る2023年1月12日に、2023年(公社)日本建築家協会北海道支部 新年交礼会が、2年ぶりの開催となった昨年に引き続き、札幌グランドホテル別館にて開催されました。正会員41名、協力会56社が参加し、恒例のビンゴ大会を楽しむなど交歓しました。また、会の中では、第3回JIA北海道建築大賞2022の表彰式も行われました。飯田善彦審査委員長からの総評の後、各受賞者へ賞状と記念トロフィーが授与されました。

## HOKKAIDO ARCHITECTS の横顔 vol.02

発行日 2023年2月27日

発行所 公益社団法人 日本建築家協会 北海道支部  
〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地 設計会館701号室  
TEL.011-788-7491 FAX.011-788-7470  
URL.http://www.jia-hok.org/

発行人 小西彦仁

編集人 石塚和彦 [広報グループ]

制作協力 登尾末佳(編集制作)  
山崎一平(デザイン)